

精神薄弱児の親の子供受容に関する分析的研究

たたら
鑪

みき
幹

はち
八

ろう
郎

1. 問 題

1.1. われわれは日常の心理臨床場面においていつも知的におくれた子供たちの問題にぶつかっている。子供の知的遅滞が、親自身のもつ子供への期待感を裏切り、親自身の生への勇気の喪失、生存の苦悩となって示され、もはや子供の問題というより、親自身の自己の生存に対する「問い」となっている場合が多い。このような精神薄弱児の親自身に課せられた限界状況を、親自身が打開し、立ち直って行く過程の中に、われわれの心理臨床の本質的部分が含まれるのである。

このような挫折的経験とそれからの立ち直りの経験は、しかし乍ら、決して心理臨床場面のみを示されるものではない。われわれはこのような親たちの多くが書き残した手記や私信（手紙）の中にも、これらの苦悩を認めることができるのである。誕生間もなく、子供が **mongolism**¹⁾ であることを聞かされたダン・ボイドはその時の様子を次のように記述している。

このことを聞いた時、私は一時、地面がスーッと浮き上って、空が頭の上でガラガラと崩れるような気がしました。モンゴリズムって一体何だろう。そんな名前は何処かで聞いたことがするような気もしましたが、記憶は、はっきりとしないし、またそんなことは今更思い出すのさえ悲しいという気持ちで頭が一杯になってしまい、ボーッとしたのです。そして、一時に色々のことが頭をかすめて、走馬灯のようにぐるぐるとまわり始めました。遺伝なのだろうか、全然望みはないのだろうか、何故こんなことが私にだけ起るのだろうか。神は多くの男性の中から、何故私だけを選んで、このような苦しみを負わせるのだろうか。何故？何故 ……、それから暫くというものは、ヒステリックな変な気持ちになってしまって、世間の人々は、私達をどんな風に見るだろうか、どうやってそんな人達に顔を合わせたら良いのだろうか。また何と説明したらよいのだろうか。将来はどうなるんだろう、どんな風にして生きて行ったらいいんだろうかという、いてもたってもいられない気持ちで毎日を送っていたのでございます。——中略—— みじめな、望みも何も総てが押しつぶされてしまったようなあの苦しみ…。一生なおらない生傷を負ったような気持ちで毎日を過して来ました。日影が重なりあったような苦しみだけが家中に充満していて、慰めなどはさがしたって何処にもありませんでした。(14)*

また同様に、家にいる精神薄弱児についての親の苦しみについて、Naは次のように語っている。

「どうしてこの子だけ、我家でも一体どの位くりかえし、くりかえしたコトバだろう。この子の上下2人の女の子ともやればできる程度の頭をもち、自慢できるほどではないにしてもまず将来心配はなさそうだ。それなのにたった1人しかいない男の子が…。近い親類、遠縁のだれかれを探してみても、

* 括弧の中の数字は、便宜的につけた手記及び手紙の整理番号である。引用したものが余り数に多く、中には名前を公開することのできないものもあるので、このような形にした。

変りもの、困った奴はいても学校に行けなかったというものは1人もいない、ちゃ遺伝ではなからうとひとり決めてホッとする。——中略—— 私たちの多くは「奇蹟」を漠然と期待して過してきたのではなからうか。ある日、あるとき、突然この子の中に眠りつづけていたある種の才能が眼をさます…。その発芽は普通の人では見逃してしまうかもしれないが、注意深く見守ってきた私共なら見つけることもできるだろう。——中略—— 「この子さえいなければ、これだけは絶対に口にすまいと固く私が思っているのも、何かの折りに私が事実そう思うことがあるからだ。この子に何の責任もない。一個の人格として、それなりに幸福に生きる権利はもっている。確にその通りだと頭の中では理解するし、そのようにしてやりたいと願うものだが、現実の生活の中での「重荷」は、つい私共にグチをこぼさせる結果になる。(15)

このような子供との毎日の生活は、どんなに張りつめていても爆発してしまうようなものである。Mさんはその手紙で次のように述べている。

私も自分で自分をしおらせてしまっではいけないとムチ打って覚悟を新たにしますが、どうしても一か月に一度位は、胸の中が爆発してしまうのです。今日もすっかり、痲癩をおこし、思いきり泣きはりました。何の罪もない子供は本当に可哀いようで、すまなくて生命のある限りででき得だけの面倒をみ、少しでも導き伸すのが私達親としての義務なのですが、ついヒステリーをおこしてしまい、何もかもはがゆく望みを失うのです。(16)

このような子供に注がれる近隣や街中の人々の眼には、耐えることができず、殆んど外出すらしなくなってしまうのである。これを Ni は手紙の中で次のように述べている。

街中へは殆んど連れ出しません。心ない他人の好奇心で眺められることが、この子自身にとってどんな進歩をもたらすでしょうか。この子は直接叩かれたり、強い言葉を浴せかけられたりしない限り、どんな嘲けりを受けたとしても恐らくは何も感じないかも知れません。然しそれらの心ない視線から、この可哀想な子を護ってやりたいと思う親心は誤りなのでございましょうか。(17)

そして、全く自分の手に負えなくなった親達は、子供と一緒にの死を思い、または神への信仰に救いを求めた。この点について E と Oi は次のように書いている。

自分の子供ばかりがこんなに弱く、小学校にも行くことができずに、来る日も来る日も家庭にあって気も滅入り勝ちで将来のことを考えると、二人で死んでしまうかとさえ思いつめることもあった。(18)

どうにも手に負えない有様でした。いよいよどうにもなりませんので、今の人たちに話せば笑われるかもしれませんが、神様におすがりするより手はないと思い、神様にすがりようになりました。(19)

上に示したものは、その僅かなものであるが、この中からも、自分の子供が精薄であることの認知が、親達にとって、如何に大きな苦悩であり、毎日の生活が希望のない打ちひしがれたものであるかを知ることができるのである。

1. 2. 自分の子供が精神薄弱児であるということの認知が、何故このような絶望となり、苦悩となり、人生における挫折となるのであろうか。

このような挫折的経験は、すべての人に同様の程度で示されるものではない。これらの苦悩、絶望的経験を生活の中に位置づけるためには、親自身の主体的条件と親自身のおかれていた環境的、文化的条件の2側面から考察を進めなければならないだろう。概念的には手記などにみられ

る親の苦悩、絶望感は主体的側面においては次のような諸要因を基礎にしていると考えられる。即ち、

(1) 子供が他人一般と異っている。人より優れなくてもよいが、せめて同じ位であって欲しい。しかし現実には、この子の遅れや異常であることが歴然としている。

(2) 親の期待が実現できない。

(3) 親が子供を同一化している。子供の劣弱性が、そのまま親の劣弱性という形で、親に認知される。

(4) 上のような認知構造から、親自身が社会人としての失敗感をもつに到る。これが社会からの逃避、孤立、孤独というように発展し、他人との交りにおける不安、焦燥感となって展開する。このような主体的条件を支える環境的文化的要因として次のような諸点が考えられるだろう。即ち、

(1) 現代の日本社会における人間を評価する最大の基準は知的な能力の有無であり、この点からすると、「精神薄弱」であることは、社会人としての能力失格者である。

(2) 換言すれば、知的能力以外に人間を評価する尺度がない。知的な正常者も知的薄弱者も同様であるという基準、即ち人格的尺度とも言うべきものが稀薄である。

われわれは便宜的に主体的条件と環境的文化的条件から、概念的な条件分析を行なった。この点からすれば、精神薄弱児をもつことが人生における挫折的経験とならない条件もまた理論的に推定が可能である。そのような条件をわれわれは一応次のように考えた。即ち、その主体的条件として、

(1) 親自身の欲求に基いた子供への期待感によって子供の養育が行なわれるのではなく、子供自身の価値欲求に基いて親の子供観が決定されている。

(2) 親の子供に対する同一化がないこと。子供の世界と親の世界とは密接に関係をもってはいるが、本質的に別なものであることを認識している。子供自身の弱さを支持して行くが、それは親自身の価値実現とは本質的な関係がないという意識がある。

(3) 従って、社会との関係は、子供の有無に拘らず自己の努力の如何にかかっている。劣弱な子供をもつことが、親自身の社会に対する負い目とはならない。

これらの主体的条件に加えて、環境的文化的条件として、次のような面が考えられよう。即ち、人間を評価する価値基準は、人としての人格の高さ低さである。知的能力の優劣ではない。知的能力の劣弱性は、何ら社会的価値の低劣性を意味しない。

1. 3. 苦悩や絶望感の発生的基盤を以上のような、主体的条件、環境的文化的条件に求めるとすれば、勿論、これから抜け出る努力は、このような条件を各個人の主体内及びその環境や文化の中に明確にとらえて行くことに向けられるであろう。しかし、環境や文化にその努力が向けられるとしても生産性が発展の基礎となっている現実の社会において、このような生産性を基礎にしない価値の転換が行なわれることは極めて困難である。従って、主体的条件の変革に努力の焦点が合せられるのである。

このような問題把握の仕方は、人格性発達を補償的、Compensationalなものに枠づけしてしまう可能性がある。人格発達は単にこのように Compensationalなものだけでなく、価値実現の行為自体が行動解発の動因となる面もある。しかし、精神薄弱児の親の場合、子供の知的遅滞そのものを変革して正常者にすることは、現在のところ不可能である。従って、この一種の心理学的限界状況において示される人格的転換や成長は Compensationalな色彩をつよくもっていることも否定できない。

以下の手記には、このような意味における主体的な価値の転換、即ち、子供に対するこれまでの重荷的経験や重荷的意識、苦悩、絶望から新しい価値実現と希望に生きる存在へと変化成長した親のすがたをわれわれは見出すことができるのである。

この子を通じて、人の苦しみ、悩み、嘆きに心から同情できるようになった。私はこれを自己流に悟りを開いたと思っているが、これから本当に、明るく、苦勞が軽くなったような気がする。(21)

上のように、他人への理解の深さに自らを見出すものもあり、また、

知恵づきがよくなることを期待せず、子供達を包む雰囲気理解と愛情に満ちた、子供たちに適したものであれば、……かつて陥ったあの暗い悲哀の淵から救われて、今や親も子も共に感謝し、更生のよるこびに胸をふくらませている。(17)

このように、子供に対する自らの位置づけが可能になったことをよろこぶ形をとるものもあり、また、

私は昔の悲しみがよるこびに変わりました。学問よりも、楽しく働いているうちに、いつとはなしに人間として、社会人として、働くことの楽しさ、尊さ、自分も正直に働くことによって世の中に役立つ人間であるという自信をもつようになった。私はこの子を心の支えとして生きて来ました。そして皆様にも共に見ていただきたく思います。(18)

このようにやり方によっては働くことも可能であることを知り、子供の働く姿に大きな満足感を示しているものもあり、

今日は、明るく別れることができた。車中、どうして今日は、いつもとちがったこんな気持ちで帰れるのかと考えましたが、ああそうだ、5年たった私達母子は、やっとここまでたどりついたので思い当りました。寮に入れたのでも、入れられたのでもない。母子があるべきところにあって、お互いに明るい気持ちで働き合う。この何の抵抗も感じない素直な気持ちで離れて暮して行けるこの気持ち…。(19)

これは別れている子供を寮に訪ねての帰途の感想である。このように母子の位置づけ、安らぎという形をとったり、その主体的価値転換の表現は、それぞれ個人によって方向を異にしているが、基本的に、安定感、見通し、親子間の位置づけなどにその共通な特徴を示しているのである。

1.4. これらの主体的価値の転換は何故、如何なる条件のもとに生れたのか。如何なる過程を経ながら変化してきたのか。このような課題をもちつつ精薄児の親達に接近すると、親達の中には、挫折的経験に苦しんでいるものや、挫折的経験を克服し安定した世界にあるものというように、いろいろの段階にあることが見出された。そこでわれわれは、一応便宜的に、現在なお、挫折的経験に苦しみ苦悩状況の真只中にある一群の親とこれを克服し安定してしている一群の親に分け

てみた。前者の親は、精薄児の位置づけから更に3つに分けられた(第1参照)。即ち、(1)自

表1. 精神薄弱児の親の子供受容の諸段階

1. 苦 悩 群	(1) 低次群—子供の問題性を認知するには、親自身が余りにも知的に劣弱である。
	(2) 楽観群—子供の問題性を認知していない。現在の状態について楽観的見通しを立てている。
	(3) 苦悩群—子供の問題性を認知しているもの。
2. 克 服 群	(1) 日常型—苦悩体験を克服し、普通の社会人として安定した生活を送っている。特に社会的発言や運動はしない。
	(2) 社会型—自己の苦悩体験や生活を、社会的に訴え、啓蒙し、まだ苦悩の中にあるものに働きかけ、このような運動に自己の使命感を見出している。

分の子供が精薄であることを認知し、これに困惑し、苦悩している親、(2)晩成型であるとか、病気のためだとかによって理由づけられ、遅れていることが、子供自身の問題性として認知されない。子供に対して楽観的な見方がある。(3)親自身知的遅滞が著しく、子供の問題性に対する認知能力が低い。これらの3群に対して、後者即ち、克服群では、2つに分けられた。即ち、(1)苦悩を克服し、これに大きなよこびを感じている。そして、これをもっと苦悩の只中にある人に知らせ、啓蒙するという形で社会的な活動を志している。(2)苦悩を克服し、一家は安定している。日常生活の中で安定した毎日を送っている。社会的な活動や発言は少ない。

これら克服群と苦悩群の2つは子供を受容する過程における程度の差であり、親の子供受容はこの2つを両極とした一つの連続体の上に位置づけられるものである。従って、克服群における価値の転換あるいは子供受容の発展過程の様相を明らかにし、条件をとらえることは、苦悩群の助言や理解に手掛りとなる問題を見出すことができるであろう。

われわれが本研究において意図したのは、精神薄弱児の親が、自己の問題を処理し、苦悩を解決し、これによって子供を受容して行く過程にみられる自己自身への克服の過程を明らかにすることである。即ち、わが子が精神薄弱児であることの認知によって経験される苦悩、挫折に如何に対処し、これにうち克っていくかを明確にし、同時にこのような過程を促進させていった動因や条件についての理解を深めることを目標にした一つの試論である。

2. 方法論的検討

2.1. これまでの研究

精神薄弱児の親に関する研究として、親の意識の分析的研究、Counselingの分析、Caseworkのレポートといった研究が今までなされているが、その数は多くない。Counselingに関する研究としては、Doll, E. A. (1953)³⁾や French, A. C., Levbarg, M., Michal-Smith, H. (1953)⁴⁾

らの研究がみられ、子供に関する正確な Information と共に親自身の Emotional Factor を重視することを強調した。そしてこの点では、所謂、治療的面接と差異のないことを指摘している。

また、Group Counseling の試みとして、Coleman, T. C. (1953)²⁾ や Weingold, J. T., Hormuth, R. P. (1953)¹⁵⁾、藤本 (1962)⁵⁾らの報告がある。Group Counseling の場合、親達が共に精薄児をもつという同胞意識から、親自身の安定感が大きくなり実際の親の指導に当っては、このような方法が有効であることが報告されている。

親の意識に関する分析としては、臨床的な経験をまとめるやり方と質問紙その他の手段によって分析した研究がある。臨床的经验をまとめたものとして、Kanner, L. (1953)⁶⁾は精神薄弱児に対する包括的な諸検査や処置の必要を強調した後、医療臨床における親との接触から、現実を正確につかんで処置する親、子供のためにつとめて努力しようとするタイプ、全く子供の現実を受け容れられないタイプの3つの類型を見出し、それぞれが親自身の Emotional Background によって規定されることを指摘した。従って子供の問題を考察する場合、このような家族及び親自身の Emotional Factor を十分に考慮に入れねばならず、これらの親へ経験深い同情的な聞き役となることが重要であるとのべている。

Waterman, J. C. (1948)¹⁴⁾は精神薄弱児を受け容れる親の心理学的諸問題に関する分析を行ない、子供を受容することの障害を形成する最大のものは、両親に対する心理的脅威であるという。即ち、「自分は何か欠陥をもったものである。自分らは人生の脱落者だ」という意識をもちながら、これを認めることができず、いつも抑えている。これは、Projection とか、Rationalization とか、Overprotection とかの形をとって示される。また宗教的信念による救いという形をとる。このような親自身の脱落者意識に加えて、近隣の非受容的態度がみられる。近隣のこのような態度は、親の脱落者意識を更に複雑化し、これに重圧を加える結果となる。親が子供を認知するのが、精神薄弱児の重症の場合より、軽度の場合におくれ、これがまた子供への処置と受容をおくらせる原因になっている。本研究における親の問題の指摘は、「問題の項」においてわれわれも論じたように、米国という文化の差を超えて、親のもつ経験の類似性が明確に示されている。

Stone, M. M. (1948)¹³⁾は Child Guidance Clinic において遭遇する親の問題について包括的な研究を行なっている。来談した際の親の態度を子供についての認識の程度から次の3つに分類した。(1) Considerable Awareness——子供が遅れていることを認知している。施設など子供の取り扱いについて正しい情報を求める。子供の問題の現実を充分気づいている。(2) Partial Awareness——部分的には子供の問題に気づいている。子供の問題がなくなってしまうことを望みながら、それがどうにもならないという不安をもつ。(3) minimal awareness ——子供が正常でないことを認めることができない。子供は正常になると信じている。全く子供の問題の現実に対する認知がない。更に、テスト結果に関する親の反応から、同様に受け容れる度合いとして次の3つに分類した。(1) Considerable Acceptance ——子供の問題を受け容れ、子供にとって、相応しい取り扱いや指導をしたいという考えをもつ。(2) Partial Acceptance ——テスト結果には納得するが、

相応しい取り扱いや指導は拒否する。知的遅滞のことよりも、外にあらわれた形をいったことに気をとられている。(3) Minimal Acceptance——テストを実施することも拒否する。子供についてどんな取扱いの計画も拒否する。このような親の問題に応じて適切な処置の必要をのべている。更に、何故親はこのような反応をするのか、両親の苦痛な経験の分析の必要をのべ、子供に対してもっている親自身の象徴的な意味の分析、地域社会に受け入れない場合の問題の分析、現代の競争社会に位置づけられるかどうかの問題、このような親たちに対する働きかけとしての Casework や Therapeutic Interview の重要性について問題の提起を行なっている。

また Rosen, L. (1955)¹²⁾ は Stone の言うような親の子供受容の類型が、生成発展するものであることを着目し、次のような5つの段階を設定した。即ち、(1) 問題に気付く段階、(2) 問題を認める段階、(3) 原因をさがし求める段階、(4) 解決方法をさがし求める段階、(5) 問題を受け容れる段階、である。

ダン・ボイド (1959)¹¹⁾ は、精神薄弱児の親としての体験から、子供受容に関する自身の成長過程を3つの段階に分けて考えた。即ち、(1) 子供が精神薄弱児であることを認知し、そのために絶望と焦燥に悩む段階、(2) 子供が精神薄弱であることを認め、これに必要な色々の処置を行なっていく段階、(3) 精神薄弱児の子供をもつことによって神を見出し、これに感謝を捧げる段階である。

これらの親の子供受容の過程の理解は、やや単純であり、理論的構成に欠けることが見出される。この点に関して、三木 (1956)⁸⁾ は、包括的な立場から、この親の子供受容を記述した。即ち、(1) 子供の現状に対する理解、(2) 子供への教育的期待、教育観、(3) 対社会的態度、世間体、(4) 親の気分、心構え、の4つの側面において、夫々第Ⅰから第Ⅲまでの受容の発展段階を想定している。例へば、(1) 子供の現状に対する理解では、精薄ということに対し半信半疑の第Ⅰ段階から、部分的に精薄であることを認める第Ⅱ段階へ、そして、精薄児の本質を理解する第Ⅲ段階へと発展の過程を示す。また、(4) 親の気分、心構えでは、不安、焦りの第Ⅰ段階から、落胆と希望の交錯した状態の第Ⅱ段階へ、そして、何らかの光明を見出す第Ⅲ段階へと発展の過程を示す。この三木の研究は、親の受容過程について、これまでのうちでは、最も明確に記述したものと言うことができよう。

質問紙を使用した研究としては、山本、三木がある。山本 (1955)¹⁶⁾ は、精薄をもつ家庭における家庭内の葛藤や緊張について調査を行ない、家庭の雰囲気や夫婦関係、親子関係、対社会的関係について精薄児の存在が常に高い比率で重荷的な位置を占めていることを明らかにしている。

三木 (1959)⁹⁾ は、明確な結論を出すまでには到っていないが、子供の能力に対する親の過大評価、将来に対する高い希望がみられること、IQ の低い子供の親の方が、子供の取扱いに対するはっきりした態度を示し、家族間における理解がつよいといった点を見出した。

また、正木ら (1959)⁷⁾ は、精薄児の人格性発達に関する研究の一幹として、試論的なものであるが、親自身の人格性発達の問題をとりあげ、この方向の研究の重要性を示唆している。

以上、臨床的研究に重点をおきながら、精神薄弱児の親に関するこれまでの研究を通覧したが、親たちに直接接している臨床家たちの行なっている臨床的研究は、このような親の問題に関する

研究の基礎をなすものとして、今後更に要求される。これと同時に、これまでの現象分析の研究に、さらに、何故このような問題を生むか、何故このような発展の経過をたどるかについての条件分析的な研究の方向が要求されることがわかるのである。

2. 2. われわれの方法論的立場

本研究においては、既に「問題の項」において便宜的に分類した親の類型中、克服群の社会型の2ケースのみを取りあげ分析した。その理由として、(1) 文献を通覧した時の問題として、単なる様相の分析、現象の分析だけでなく、その条件の分析にまで迫ることが要求された。即ち、問題自体の中に入りこみ、そのすがたを深くとらえ、記述することが先づ要求されるのである。この点から、われわれも単に表面的な変化の流れでなく、最も個人的な生活史を明確にし、内的経験にじかに触れることを意図した。(2) このために、少数のケースに限定し、特に極めて典型的な親の変化過程のみられるケースを選択した。(3) 更に、このような内的経験に触れるための資料が比較的多いケースに限られる。この3つをあげることができるであろう。

このようなわれわれの意図を満すために、われわれは、本ケースに関係した手記、私信、その他できる限り多くの資料を入手する努力を行なった。本研究においては、このようにして集められた手記、私信を中心にし、他の資料を補足的に使用していきたい。

そこで、先ずわれわれは、手記、私信分析における方法論的検討を行なっておきたい。正木(1959)は精薄⁷⁾児の人格性発達に関する研究において、親の人格性発達の試論をおこない、手紙分析を用いた。そしてその方法論的検討の中で次のように述べている。

1. 手紙は作文、日記と同じく、精神の客観的表現として児童心理学、青年心理学、社会心理学において研究の資料をなすものである。しかし、手紙が特に表現にもつ心理学的意味は、一人が他を相手として、自分の世界、自分の気持、欲求などを書字をもってあらわし、伝えるということである。端的に言えば、書字を通して、相互の自我の意識の前で己れを語り、伝えることであり、さらに、その効果を予期することである。この故に手紙は、人間理解の有力な手がかりとなると考えている。

2. しかし、手紙には、文字をもち、文章を構成して表現をする故がに、この表現能力に大いに制限を受ける。この故に、内的世界の表現が充分でなく、または、歪曲されるという事態も生じるのである。次に、手紙の表現には、儀礼的、形式的表現がある。これは内的世界の表現性にあずからない。また、表現の内容が事務的にすぎない場合もある。この故に、手紙そのものが、いつも、われわれの狙う資料的価値を有するものとは限らないことを反省しなければならない。

3. つぎに、手紙の表現性にいろいろ形態があることも注意せねばならない。すなわち、以下の形態が見出される。(1) 心の動き、感じ、思想内容がそのまま純粋にあらわれている。(2) 一部はあらわれているがその他は暗示的に示されている。(3) ある感情、思想内容が特別に表現されている(過剰表現)。(4) 儀礼的紋切型的に表現されている。(5) 故意に抑圧し、歪めて表現されている。ここに、表現に純態と不純態があるので、手紙の資料性として、この点の吟味が留意されるべきである。

われわれは、分析資料として、手紙のみでなく、手記をも含めた。手記の場合、公表されることが意図されて記述されている点から、上に言うような内的経験の表現に関しては、手紙よりも過剰表現、儀礼、形式的表現や歪曲が多いであろう。しかし、この点についての注意と吟味がな

されれば、手記も手紙と同様に分析的資料としての価値を有するものと考えられる。われわれは表現における過剰性や歪曲性を防ぐ手段として直接面接や周囲の人々の印象などによってこの点を吟味した。

ここで取扱った分析資料の主なものを示すと表2のようになる。

表2. 本研究に使用した主な資料

	手紙類 (通)	手記類
N. O. に関するもの	45	「愛の奇蹟」 ¹¹⁾ 「この子の杖に」 ⁽¹⁰⁾ 「両親のつどい」* 「手をつなぐ親たち」**
その他	17	「青鳥十年」 ¹⁷⁾ 「手をつなぐ親たち」 「両親のつどい」

3. 結果

手紙や手記を読んで行く過程で、これら2ケースの進んで来た道筋に概念的な一つの過程を見出すことができた。即ち、(1) 子供が精薄児であることを認知するまでの迂余曲折があり、(2) この間の親自身の苦悩、不安、絶望があり、(3) 次に、何とか現状を打開しようとする数々の努力(無駄な骨折)があり、(4) その後、漸く、このような子をもつのが、自分1人ではない、同胞がいることを発見し、(5) これに伴って、精薄児としての子供へ本格的な努力を行なうようになり、(6) これまで苦悩と絶望の種子であった子供へ、努力することの出来る道を知ることによって、希望を見出し、(7) このような努力のうちに、親自身の人格的成長、もっとこれまでより広い視野に立って、ものをみる事ができるようになったのを子供に感謝し、(8) これらの喜びや感謝を、未だ悩み苦しんでいる人々に知らせるために努力していく、という8つの過程である。従って、以下の結果については、便宜的に概念化したこの8つの過程を背景にして記述していきたい。

3.1. ケースNの場合

現在、精神薄弱児のための運動をすすめ、精力的にこの活動の中心となっている。子供はIQ 60, mongolism で、滋賀県の施設を経て、現在、大阪のある工場へ就職、住み込んでいる。

3.1.1. 精神薄弱に関する認知過程

子供好きで既に4人の子供を生み、本人以後にも1人の健康な子供を生んだ母親と、軍隊で参謀大佐として、指導性を高く評価されていた父親との間に本児は生れた。本児の出産の状況は次のようであった。

赤ん坊には、何の異常もありません。690匁の、標準よりやや小さいが、整ってふくよかな体つき、真赤なかわいい面ざしから、この子もきっとよい子になると期待されていました。母体も、妊娠中はつわりも知らず、ほかの子の時同様順調に、また肥立ちもごく自然に、ただ予定日より10日早いというだけで、

* 「両親の集い」は問題児をもつ親たちの雑誌で、日赤産院小児科、小林提樹氏を中心にして1956年から発刊(月刊)され、現在まで84号を数えている。

** 「手をつなぐ親たち」は、全日本精神薄弱者育成会の機関誌で、精薄児の親の啓蒙指導を中心にした雑誌であり、1955年に発刊(月刊)、今日まで80号を数えている。

これも私の分娩経験には、どの子も平均5日前後はある狂いでした。分娩が近づくと、「どうか五体満足に」と親は祈ります。本児の時も、それを見とどけると、私は安堵の眠りに落ちてゆきました。(229)

他の兄弟と変りない妊娠と誕生だった。しかし、この子は典型的な mongolism だったのである。この点に関する親自身の認知は極めて遅々としていた。生後8ヶ月に罹った水痘は、本児の遅滞の理由づけにされ、認知は一層遅れた。4才になった時、口がもどがしく、一見して遅れている子となって、はじめて附近の官立病院の小児科に行ったのである。診断の結果は、「小さいときの患いは、案外大きく災いするものだから、そのうち体の回復につれて言葉も正常になろう。もう少し様子を見るように」であった。しかし、日が経っても子供の様子には何らの進歩もみられなかった。親の不安は増大するばかりで、その後は次々と内科、小児科の病院を歴訪した。この歴訪にも拘らず、どの医者も子供が精薄であるということを親に伝える人はなく、ただ、「そんなにせくことはありません」という慰めの言葉を与えるだけだった。この慰めは、一時的に不安を和げることはできたが、しかし、そのために、子供への教育的処置は放置され、子供の状態に関する認知を遅らせ、慰めの言葉の裏に、更に大きな苦悩を見出さなければならなかった。この点を母親は次のように記述している。

もちろん一時の気休めでした。而も親馬鹿の本能というのか、赤ん坊のうちに死線をさまよう大病をしたのだから当然のおくれと考えて、先生の言葉にぼんやり勇気づけられてしまう私。なぜ、親は子供をよい方にばかり考えたがり、きびしい現実を眼をふさいでしまうのでよう。なぜまた1人も、真実を告げて下さるお医者様がいなかったのでしょうか。(230)

学期に達してもなお、親自身の子供に対する認知は充分でなく、2年は遅らせたが普通学級へ通学させ、普通の子供とはちがう、遅れていることを知りながら、子供の現実を正しく認知してはいなかった。ここでも医者者の態度が決定的であった。進学延期証明を医者から受けた時の様子を次のように母親は語っている。

診断書を渡されて、私ははっとしました。それには「精神薄弱により……」の見なれない文字が書かれていたのです。精神薄弱とは何のことでしょう。何となく胸さわぎがしてお尋ねしましたところ、校医は何故か答を避けられる風で「いや何でもありませんよ、そんな心配をする程のことではない。そのうちによくなりますから」とにごしてしまわれました。この曖昧に捨てられた言葉“精神薄弱”の正しい知識が、このとき先生の口から説明されていたら、これからの子供の処置について相談もでき、戦争中の不自由はあるにしても親としてできるだけの手はつくしてやれたでしょう。(232)

しかし、家庭においては、日常の生活で、子供がよくできる面のみに注目し、それによって慰さめられ、子供の問題については決して悲観的ではなかった。

こんな子供にも、たとえば、大小便などは誰よりも世話なしで、夜尿も4、5才頃にはびたりと止り、一度の失敗もなく、手のかからない反面がありました。また、実によく気づく子供で、お客様と見れば座布団を出し、祖父が煙草を取りあげれば、黙っていても灰皿をもってき、夏になると、いわれないうちからうちわをとってくるという風でした。こんなに気がつくのだから、あとは言葉が話せたらいいと家中の

願いがその一点に集中されていたとも言えます。(231)

これに加えて、近隣もまた「お兄さんたちが利口すぎる。発育の晩なのだろう。特別なのではない」という慰めは、事態を一層不明確にしていたのである。

このように主体的にも、医者も家庭も近隣もすべてが、事態を不明確にし、問題への直面にブレーキをかけた。このために子供への正しい認知も遅れ、次に見られるような親としての大きな苦悩を味わわなければならなかった。子供が精神薄弱児であるという認知が得られたのは、もうこれ以上普通学級に入れるに忍びず、親自身求めて行った養護学校においてであった。そこで、沢山の同じような子供たちの明るくのびのびした姿に接し、これらの子供たちにも教育によって救われる方法のあることをはっきりと自分の眼で確かめることができた。それだけに、この学校に入学することの希望も大きく、定員を遙かに超える希望者をみて、入学できなかったらという不安も強かった。

もし落ちたらどうしよう。この子なりに生きてゆける道を講じ、私は子供と2人、袋貼りでも何でもやるつもりでした。私はすべてを放棄しても、自分をしっかりこの子につないで、まだお乳臭いこの子の精神を支え、いのちの限り、生きていく限りは、この子の杖となる覚悟でした。(242)

従って、入学のよろこびは、「神に手を合せ心からの感謝」をしたいような気持だった。

以上、ケースNの場合、子供が精神薄弱であるという認知を得るための過程には、種々の阻害条件が参与し、そのために必要以上に遅れ、漸く、中学入学を機会に明確な情報を得るという迂余曲折があった。これに伴って、以下の如き、苦悩の過程も人以上に長く強い結果となったのである。

3.1.2. 苦悩体験

子供が学令期に達した時、第二次大戦は最も苛烈を極め、学童は疎開を余儀なくされた。疎開地を選ぶに当って、母親の最も注意したのは、「遅れた子供をもつこと、知らない他人がこれを如何に快よく受け容れてくれるか」を確かめることであった。母親は、いつもこの子供の上に、社会の冷たい眼を感じていたのだった。

終戦後、疎開先から東京への帰途、父親が軍人であることを知る人々は、敗戦の責を恰も、この子に負わせるように、「おくれた子をもって、いい気味だ」という吐き捨てるような冷笑を示すのであった。そして、東京の生活も、近隣の同情のない冷たい眼の下で行なわなければならなかった。次の手記は、母親のこの苦悩をよく表現している。

その頃の子供に対して、家族は明るい気持で対していましたが、一步外へ出してみる子供の姿は、やはり淋しく、通学の途中、わき目もふらずに歩くこの子は、友だちに出会うと、つと道を横切り向うへ渡るのです。「アハハ行っちゃいやがった」と追いかけてくる罵声、肉親にとって、これほどつらいことはありません。不幸な子をもつ親だけがわかること。この一瞬、神も仏も信じられなくなるのです。(251)

また、同様に、子供に対する周囲の態度について、次のように記述している。

何となく抜けている容貌や、鈍い動作を面白がり、上級生ばかりか、入学前の子供まで、この子を見ると、駆けよってきて後から本人の名前を呼び捨て、この子が振り返ると「アハハ」と笑うのです。いきなり背中をたたいて逃げ出すものもありました。妹と一緒にない時はなおされるままです。1人がすると他の子が面白がってまね、誰もとめようとしません。この子は眼に一杯涙をためて、いつも黙々と意地悪な子供を避けるように歩いていました。いたずらは年のいかない子ほど無遠慮で、「あの子はバカみたいだね、バカバカ」などと廻らない舌で言い、親が傍にいてもたしなめるところか。本当に変な子だといった顔でみつめています。それをじっと物陰からみているつらさ。ときどきは「そんなことしないでね」と口を出しますが、相手はフフンと笑って、なんだこのバカの親が、といった眼つきで迎えます。だれでも好きこのんでなったわけではないのに、この子は一身に災難を浴びていやな思いをさせられる。私は何故と問いかけて、頭の中をかきむしりたくなるのでした。私はそんな悪いことをした覚えはない。なのに、何故こんな目にあわなくてはならないのでしょうか。(238)

そして、子供の父兄会は、これまで兄たちがすべて優秀だっただけにつらかった。

とりわけ父兄会には胸がしめつけられ、その日がくると、誰よりも早く出かけて行き、誰にもみつからないようにと念じて帰るのでした。上の子が皆、クラスで3、4番を下らない成績を通し、「お宅のお子様はよくおできになって」と羨しがられていたのにひきかえ、この子はクラスの劣等生です。この子を引きあげようとすれば、クラス全体の向上が失なわれ、父兄の御迷惑、先生のお苦しみにもなるでしょう。今度こそ、堂々と出ようと思っても、つい気おくれがしてしまうのです。人なかにいると何故か圧迫がつよいのです。(241)

子供の幸福だけを考え、自分の淋しさを抑えて、滋賀県の施設へ旅立たせたことに対しても、外の人の眼は決して暖かくなかった。

近所の方々も、「よく遠くへ出されましたね」といってくださいました。私も今のよろこびを幸直に打ち明けていましたが、しかし、よその人は、必ずしも私の気持を素直に聞いて下さったわけではありません。近所のある方が道で会った時に言われました。井戸端会議で噂されているのは、「あそこでは、あの子を遠くへやっつてよろこんでいる。かわいそうなのは子供だわね。親にまで邪魔にされているんだから。バカ程かわいいのが親だっていうのに、よくあんな涼しい顔をして歩けたもんだ」。世間の人々の、「よく遠くへお出しになりましたね」といわれる言葉の裏には、「何と無慈悲な親よ」という意味がこめられていたのです。(256)

このような外から与えられる苦悩は、母親の内面では次のような形をとっていた。

おくれたこの子によって引起された劣等感。なんでもない、そんなものと仰言の方は、幸いと経験があまりにならないのです。私は胸の張り裂けるばかり、腸のちぎれるばかり、頭のつぶれるまで思い悩み考え、反省しました。なぜ、私はこんな子をもったのか。親類にも、近所にいもないのに私だけがこんな立場に追いやられる。親類でも、この子のいることを何かいとわしい気持で、連れてこられては困るという態度を見せる。ついこの子をつれて行くと迷惑らしいから、皆行くのはやめなさいということになって、親類の往き来も疎遠になってしまう。この子さえいなければ……、この子さえ、こんな風でなければ幸せなのにと私は思いました。(242)

そして、このような苦悩の最後に行きつくところは死であった。

世間の冷たい圧迫を、この子は死ぬまで受けつづけなければならない。いっそ早く死ぬ方が、この子の

真の幸せではなからうか。そして私もこれから先、生ある限りこの苦勞をなめなければならぬ。……死ぬ方がましではなからうか。夜となく昼となく、頭についた暗い考え。危く、自動車にひかれようとしてハット警笛にとびのいたこともありました。外を歩いて、乗物の中でも、家で一生懸命に洗濯の最中でも、掃除や編物に忙がしくしているときでも、休みなく考えがおそいました。(234)

母親にとっては、家族以外の人との接触はすべて、このような苦しみを生み、悩みを深くするものに過ぎなかった。この苦悩は勿論母親だけのものではなく、父親も同様であった。当時の様子を父親は次のように記している。

私は青壮年教育に対しては、愛と熱と名人芸を移すコツについて多少の自信をもっていたのですが、わが子の精薄児教育にはホトホト匙を投げ、性急な私には全く手に負えないものとして自分を卑下し、放心の状態に陥りました。それでも在宅の日曜、祭日には、必ず電車で遊園地や動物園や公園や野球に連れ出し、学校以外は家から、1人でほとんど外に出ないまま、また学校でも6年間運動場で遊ばないこの子のために少しでも強くしようとして、ひねくれないようにと努めたのであります。しかし、往復の電車を待つ間も、遊んでいる間にも、どうか誤って死んでくれないものかと何度思ったことでしょう。(291)

このように精神薄弱児をもつ苦悩は、家族全員の上に重くのしかかっていたのである。母親は自らの死と子供の死を願い、父親も子供の死を願った。また、兄姉たちにとっても、自分たちの結婚と出産が、もしまた同様の子供が生まれたらという恐怖になって迫った。このような避け得られない苦悩に、それではどのように耐えていったのであろうか。この苦悩にも耐える力を与えるものは何であったのか。

3. 1. 3. 苦悩を耐えた力

意識的な面では、何によって耐えることができたのか解らないような、夢中なものだった。後で、反省して、特に意識化される事柄は、母親にとっては、主人の暖かい思いやりと、常にこの子の味方になり支えてくれる同胞家族であった。

もし私に温い家庭がなかったら…と思います。長い年月、責めさいなんだ心の痛手から、どんな間違いをしでかしたかもしれないといえるでしょう。年老いてゆく親たち、多勢の家族の柱となって、いやな顔一つみせず、朗かに振舞う主人、そして愛らしい7人の子供たち。私がこの子と共に死を選べば即刻、私と明には安楽が訪れるかもしれませんが。けれども、残った者が幸せになれるでしょうか。いつの時も私を信じ、誰ひとりこの子にひどいことをする者もなく、皆共に苦しみ、温かく見守ってくれる家族。もし私が過ちをすれば、私はわるい母、わるい妻になる。いくら苦しくても一人よがりな死は人間本来の道にもとる。堪え難い苦痛も、生きて踏みこえることこそ、私に課せられた人のつとめではあるまいか。今まで私は幸せすぎた。その私に神様が試練の鞭を当てていられる、鞭がいたいのは、それだけ幸せが深いからなのだ。試練に打ち克つことを神様は願っていられる。こう考えてくると、悪夢から醒めるように、何もかもこの考えに取りすがって、生きる力の湧き出るのを感じました。(244)

3. 1. 4. 無駄な努力

子供が精薄であることの正しい認知のない上のような苦悩の時期において、母親は母親なりの努力で、この子供の変革を期待した。これらは、全く、ただこの苦悩状況から逃れるためのあがきにも似ていた。そして自分たちの努力ではどうにもならないことを知って、焦燥と苦悩は一層

深まるのである。このような努力とその苦しみを母親は次のように記述している。

学校から帰るとおさらいをしました。妹が10分でできるところも、この子は長いことかかります。国語はともかく、算数の概念はないのも同然、「その次は？」と取り出して聞かれると、わからず、4よりも5が大きく、3に1を足すと4になることすらわからないこの子のために、積木を並べたり、お菓子を教えたり、お皿をまぜて区別させてみたり……、生れつき気の長いつもりの私でもその辛抱は一通りではありません。「さあせう一度」と机をたたいて緊張させたり、時には、思わず手を振りあげてたたいてしまったから、ハッと子供の様子に息をのむのです。眼に一杯涙をためて、一本一本指を数えている子供…、私は思わず、わっと抱きしめて泣きくずれるのでした。(234)

このような努力にも拘らず、その努力は報われないどころか逆効果であることを知らされるのであった。

私は長い間、ひたすら子供たちに追いつかせようとあせり、読、書、算数のみが学習と思い込んで随分無理を強いたのですが、すべては水泡に帰し逆効果でありました。(198)

本児にとって、このような努力が如何に数多く続けられても、その点で子供に期待することが無意味であることは、理論的に理解することができる。しかし、母親は自分にとって最善最大の努力を、小学時代の6年間続けたのであった。そしてやがて、母親自身にもその努力の無意味さに気づき、この子のために、特別な教育を行ない得る場を求めたのであった。

3.1.5. 同胞の認知

自ら、子供を特別に教育することを求めた母親に、担任が、養護学校をすすめた。普通学級の中で、子供と教育することの無意味さを知った母親にとっては、このような特別の学校こそ希望であった。入学試験のために出かけた養護学校には、同様の子供をもつ多くの親たちがいた。母親はここで、はじめて何の偏見もない親たち、教師たちの態度に接したのであった。母親にとって、このことは大きな発見であった。同じ精薄の子供をもつ親たちとの話し合いは、母親に子供の問題の現実直面させるに充分な支えであった。このような同胞の支えの中で、母親のこれまでとはちがった、子供への積極的な努力がはじまるのである。はじめて、この親たちに接した印象を次のように記述している。

初めて耳にする悩みの方々のお話、世の中にもっともっと苦しい目に合われている自分より不幸な方たちがあったとは。それと知らない私は、自分の不幸にのみ溺れて歎く愚なだけの母親でした。たった一人の子なのと言われるお母さん、「年をとって生れた末子です」と淋しげに語られる人。姉妹の中の一人息子。やっとできた女の子もいる。身体障害もある人は、なお深刻で、それが大方家族にも理解がなく、母ひとり苦しみたかかっていられるのです。そろそろ五十にもなろうという人が、未だにお姑さんから家の系統にはこんな子はいない、連れて出ていけとせめられる。総領のため、下の子たちから、馬鹿にされる。上の子や親類の手前、また世間に対して肩身の狭い気持を通さねばならない。にもかかわらず、同じ智恵おくれの子に対して、もっと深く心を痛め現実に即してとられて来たその方々の方法……。(247)

このような親たちとの接触は、母親の子供に対するこれまでの価値観を根本から変えてしまったのであった。即ち、

私達はこの日まで、一番不幸な親たちであると思っていたのですが、下には下があって、白痴や二重障害児でなくてよかったとさえ思い直し、また親達と話し合ってみると、子供に対する処置については、上には上があるとほんとに恥かしく、我が子にすまなかったと自責の念にうたれた。(195)

このような子供をもつのは、決して自分のみではないという認知は、これまで社会に背を向け、常に孤立的であった心を外に向けさせた。また、実際に養護学校に入れてからの、子供の驚くような明るい方向への変化は、これまであらゆる手を施しながら変化することのなかった子供への教育に大きな期待を与えられたのであった。今後は、子供の線に沿って、着実に、これまでどちがって子供のための本格的な努力が、希望をもって続けられることになる。

3.1.6. 子供への本格的努力

長い苦悩の時を経て、漸く新しい希望が生れた。母親の努力が、無駄骨折でなく、少しずつ実を結んで行く。そのことによってますます元気づけられていった。

養護学校中学部への入学は、母親にとっても家族にとっても、大きなよろこびであった。子供に示される特殊教育の効果を感謝の気持ちをもって味った。しかしやがて、新しい疑問が現われる。中学部を卒業したら、それから先、子供はどうなるのか。子供が大きくなるにつれて、次々と新しい問題が生れた。

けれども、私たちはその子供にまだどうか大きくならないで、という気持ちを心の奥底に持っているだけでございます。…… 特殊学級や養護施設、 そういうところに入れていただいている間はまだよろしゅうございます。一安心という形でおりますけれども、さてそこを出なければならぬ日がやって参りますと、何かこの子供にできることはないだろうか、何か、この子供に一生の仕事がないだろうかということを願うようになりました。(206)

児童期から青年期へと子供の成長に伴って、親の子供に対する努力も変化していった。親の問題意識はこのように子供自身の成長過程に支配され、親が子供にリードされて変化していくことがわかるのである。そして、子供がやがて成人し、社会人として立たねばならない年齢になった時、親にとっては、自分たちの死後の世界に、親の庇護がなくとも生活することが可能な社会をつくってやらねばならないという次の課題を見出し母親自身の活動も、これまで自分の周囲の親たちとの慰め合い的なものから、直接社会に訴えるという大きな活動へと進展したのである。

この子供は一生懸命に働きます。まじめに何の異心もなくただ仕事に取り組んで一日を黙って励んでおりますけれども、その成果はまことに少なく、中には、自立できるほどの収入がおありの方もありますがそういう方はごくわずかでございまして、大部分の者はお小遣いにもとどかないような収入しかございません。それを思いますとき、私たち親のないあと、この子供たちはどんなに生きてゆくのだろうか、私たちの心配は、このごろまた深刻なものがございます。(207)

これを解決するために集った母親たちの集団が、今日の精薄児育成会の母体となった。これまで、家から外へ出たことも少なかった母親は、毎日、精薄児の理解を求めて、政治家たちや関係

者の間を廻り歩いたのである。このような外への積極的な活動も、母親にとっては、子供の成長に伴って必然的に要求されるものだったのである。

3.1.7. 子供への感謝

子供によって惹起される問題について、ただこれを歎くだけでなく、自ら積極的に活動することによって解決する力を次第に得ていった母親は、このような活動の中で、他人との交りから、社会をみる眼を養っていった。

このような自己の社会的成長という形での変化は、この子供がいなければ起ることのないものであった。従って、このような自己の成長は、子供から与えられたものでもあった。これまで「悩み」でしかなかった子供が、母親自身の成長の契機を与えてくれる存在となったのである。このことに気づいた時、母親のこの子供の存在に対して感謝の気持すら抱くことができるようになったのである。この点について母親は次のように述べている。

私は長い間「この子さえなかったら幸せなのに」と思っていました。けれども、この子ゆえに憂いことつらいことに打ちかってまいりました。この苦しさをのり越えた私には強い力が湧いて来ております。どんなことにも堪えぬける自信を得たと思われまます。そして気の毒な人に心から同情してあげられるようになりました。

知能のおくれた子を育ててはじめて、せめて普通の知能をもってくれたらなと思ひ、人の上に立つ優秀さよりも、人間としての豊かさを望む気持になりました。世の中の人がみな、人としての尊さを豊かにもてば、社会は美しく、そこには不具の子を背負うつらさも、不具なるが故のひがみも、不幸に悩むこともないでしょう。

もし、おくれたこの子がいなかったら、私は家庭の世話女房として、世間知らずな女で終わってしまったえとでしよう。力はなくとも、少しでも世のため人のため、お手伝いしたいとの心持ちに私を高めてくれたのは、この子であると考えようになりました。(529)

このように皆、人様のおかげによって、私どもは仕合せになったのです。かつて私は「この子の杖に」なってやろうと決心したのですが、逆に、この頭の弱い子があるために、どれだけ勉強になったかわかりません。そして今私は「この子が杖に」なってくれて、一段高いところに登ることを得たようです。今まで見えなかった広い、大きな世界がみえました。からだ中が新しい希望に燃えています。そしてまだ、子供をしっかり抱きかかえて悲しみながら、かくそうとして苦しみあえいでいる方々が沢山いられることを知りました。

顧りみれば、私どもの、あちこちと探り歩いたところ、切り開いた道は何と遠廻りなものであったかにも気がつきました。もっと真直な道を、そして茨のない楽しく手をふって歩ける道を作るために、いっそう努めてまいりたいと存じます。(260)

3.1.8. 社会運動へ

母親を中心として、これまで動いて来た運動は、やがて父親の手に渡された。これまで父親は、常に背後から母親を援助していたが周囲の人々の懇請に応じて、精薄児育成会の理事を引受け、これに専念することになる。その当時の父親の心境は次のようなものであった。

私も今後は過去の経験を生かし、米国の精薄児の父、ボイド・ダン氏のいう精薄児の両親が昇って行かねばならない三つの段階の最後「われわれが自分のことを忘れ、自分の精薄児の問題をすべての精薄児の問題に押しひろめる段階」へと心がけ、とり残された子供たちや御家族への奉仕を通じて、今日の幸福と

鑑：精神薄弱児の親の子供受容に関する分析的研究

感激に報いてまいりたいと考えはじめ、ここに生れてはじめて、新しい人生を見出したのであります。私の現在の心境は、妻に引かれて善光寺詣りをいたし、2人で拝む如来様は、精薄者のこの子供そのものであります。そして最後に、世の精薄対策は「母親にはじまり、解決の鍵は父親の反省と力強い協力にある」との確信を得るに至ったのであります。(263)

上のような確信を基礎にして、精薄の問題に飛び込むことができたのである。そしてこれを支えたもう一つのものは、父親の言う「烈々たる人道主義」の欲求であった。

数年前、夢にも考えられなかった育成会の専任理事の大役を、社会事業にはずぶの素人の私が引受けなければならなくなったとき、一番考えた問題はやはり人道主義と政治力の問題でした。

私は蒙古型の精薄の子を抱えて20年間悩み続けたものであり、太陽のような母性愛と特殊教育の偉大さにはじめて目覚め、私以下全家族が、この子の育成に協力し、良い学校と良い施設での立派な諸先生の適切な御指導と信楽町という恵まれた地域社会の環境に育てられ、奇蹟と言われる成果を収め、安心立命の境地と到達した後であったので、「この喜びを一人でも多くの方々にお福分けしたい。私達夫婦の歩んだ愚かな茨の道をこれからの親達には、歩ませたくない。新しい日本、いな世界には一人の精薄児も生れ出ないようにしなければならない」という大勇猛心(これが私の人道主義の根底と申すべきでしょう)を奮い起し、当時の育成会として最も不足していた政治力の結集とその発揚に気遣いじみた努力を続けて来たのであります。(III)

指導力やまとめる力については、軍隊時代から自信もあった。そして、この努力は着々と実を結んでいったということができただろう。それに伴って、上にのべたような、運動への参加の単純な、しかし力強い動機が背景に消え、次第に精薄教育に関する抽象的命題が前景にあらわれるようになる。経験的内面的な必然性が理論化され、原理的な形で表現されるようになる。

以て自らよい環境を造り出す術を知らない薄幸の精薄児達の福祉向上のため、私共親たちが、固く手を握り合って努力し、安心して死に得る福祉社会をつくる目標を掲げ、皆様の共鳴を仰いだのであります。最後に私が強く心をうたれる米国義務教育制の父、ホーレス・マンの「もしあなたの住んでいる社会に不幸な子がいるならば、それはあなたの良心の働きが鈍っている」との言葉を皆様と共に想い起し、一層の勇氣と大きな愛情を「児童憲章を生活の場に生かすために」掲げようではありませんか。

このような漸進的变化は今後も続くであろう。われわれにとっては、この変化の方向を見極める必要もあるが、しかしこれは今後の課題である。

以上、われわれはケースNの父母の手記を通して、親が子供を受容する過程を8つの段階に分けて分析した。次に、われわれはケースOを取りあげ、同様の分析を試みたい。

3. 2. ケースOの場合

ケースOも、同様に克服群の社会型に属する。子供は個性マヒ。IQ 64、現在滋賀県のA施設において生活している。以下、このケースの場合もケースNにおいて準拠した8つの段階を基礎にして分析を行なう。

3. 2. 1. 精薄認知の過程

子供の出生に当っては、祖父母たちの「五体揃っていればよい」といった考えよりも、ずっと

計画的に行なわれた。出生は両親にとって、期待と希望であった。従って、子供が生まれた時のよろこびは大きかった。仕事にも新しい力が出てくるのを感じた。

私達はもっと科学的に生れ来る子をみようと考えました。夫婦共結婚前に健康診断を受け、また、妻の月経の止った次の月からは毎月、町の産婦人科へ行っては、月例診察を受けて子供の為に、この20世紀にそった生活、即ち、信念と知性の世界の波におし流されないような良い子供になってもらおうと、二人で勇み立ち、理想にもえて出生をむかえたのです。――

話に聞いた赤ん坊が、今現実に私の娘という事実となって目前にあるのです。さあ、良いスタートだ、これからは張切ってやるぞ、と自分の考えていたプランに従って全能全力をあげて育児にかかる心構えを強くしたのです。(103,108)

小さい時から、不気嫌で、敏感でよく泣く子供であった。しかし、子供はこんなものかということで、それ程気にもとめずに生活していた。2、3才になっても一向にのびて行く様子もなく、同じ状態が続いた。惱性マヒの子供をもった近所の女医さんに「おかしい、一度病院でみてもらうように」といわれても、「この子は頭も大きいし、“おく”なんだよきと、大器晩成型なんだよ。そのうちに何でもちゃきちゃきとやるようになるさ、両親ともパリパリしているもの」と慰め合って、楽観的であった。

この子はいわゆるおくな子で、そのうちに何とかなるだろうと思っていた。このまま放っておくと、いつまでたっても自分は何もできない子だ、ということがわかるまでに約3年かかりました。(79)

いくら経っても子供が同じ状態なので、遂に近くの病院の整形外科につれて行った。生来敏感な子供で、車に乗せることもできず、大変な苦勞の末、やっと辿りついた病院で、「惱性欠陥」で治療法なしといわれた。もちろん、この診断に納得することはできなかった。そして、もっと信頼がおけると考えられた病院へまた出掛けたが、診断はやはり同じであった。この間の事情を父親は次のように記述している。

こんなにまで苦勞して行った病院で、惱性欠陥、治療法はなし、といわれたのです。そんなことがあるものかと、信用もできずに、大病院へ行けばこのことを打消してくれるか、若しくは薬、注射など、この進んだ時代に何とかしてもらえたらと大きな期待をもって、K大の整形外科へ行ったのです。そしてそこで我々の心とは全然反対の不治の病、惱性小児マヒらしい、といわれたのです。その時の妻の顔、6年後の今でも、あの時のことは忘れません。人前では、あれ程自分をかくしてられる妻が、涙を目に一杯うかべて一人では立ってられなくなって、私にすがりついたのです。

病院から家にどうやって帰りついたか、その時の様子は、全く夢中でわからなかった。そして、もはやすべての期待も希望もなくなり、母親はただ泣くだけであった。

どうやって家に帰ったか夢中でした。家に入ってもただ2人が子供を真中にして、食事もせず一言もいえず、ぼーっとして向いあっているだけでした。そしてその夜、子供は火のつくように泣くのです。妻は「子供と一緒に死ぬるんなら……」と自暴自棄になって、小さいベットで2人で泣いているのです。そして疲れて眠ってしまいました。(105)

父親にしてみると、しかし、まだ泣ける人はよかった。すべてを支えて行かねばならない立場

としては、泣くことによる慰めも得られず、ただ一時的に、子供のことを何にも考えない、忘れてしまうという形の思考停止によって、辛じて自らを保った。

私だってどうともできるものじゃない。なるようにしかならないんだ。だが、こうやって泣ける者達はまだいい。それによって何らかの慰めができるんだから。だが、それすらできない私。縋られる私は一体どうすればよいのだろう。えい総てを忘れてしまえ、明日は明日の風が吹く、ここまで来てしまえば、総てがマイナスなんだ。これに何かを加えたって零になるのが精一杯なんだ、と、やけになって寝てしまったのです。(105)

その次の日から、生活は冷淡で単調なものとなった。これまで抱いていた子供への期待もすべて失なわれてしまった。子供に何をしてやればよいのか。なす術もなく、一時的に目前の事実を黙殺するのがやっとであった。しかし、勿論、これで問題が解決されるものではなかった。心の奥では、いつも子供のことに大きな心配があった。

次の日からは、少なくとも私は総てを忘れたように、冷静に勤めに出て、夕方には帰るという時計の針のような毎日がやって来ました。ただそれだけの毎日では何だかものたりない、二人共満されない気持をもって、くさくさすれば映画に行き、つとめて朗らかに過すようにつとめました。だが心の奥にはやはり大きな心配が残っていたのでした。そして、この気持をつきつめて考えて行かなくてはならないのですがとてもその勇氣すらありませんし、また、どうにもならないというあきらめも手伝っていたのです。(104)

やがて、このような目前の事態を黙殺し、単調な生活を送ることに堪えられなくなり、少なくとも気持の上で、事態を明確にし、納得しなければやり切れなくなった。最終的にこの決意のために、N病院の門をくぐった。

N病院小児科へ親子3人で行きました。我々の気持は前に、N大、K大ですでに脳性欠陥といわれていたので、それを打消そうとか、別の病名だろうとか言うことを知りに行ったではありません。「一体この子の脳欠陥にはっきりとした病名があるのだろうか、そして治療法があるのかしら」と病気に対して種々の疑問をもって、医学的に十分に納得の行くまで説明してもらい、これからの我々が進むべき道を定めようと心にきめて、そしてこの場合に臨んで、どんな事を先生から言われても、つとめて冷静に振舞おうと、自分自身によく言い聞かせながら、最後の断を下してもらい被告のように、神妙に病院の待合室で順番を待ったのです。(128)

ここでの診断もまた同じだった。しかし、ここでは「薬や治療はなくとも、何とかしてこの子を救う方法はないのか、どんな方法でも試してみたい」という両親に対して、「第一、薬を飲ませてみることに、次に子供の毎日やったこと、また家でして上げたことを日記の様に、詳しく書いて出すこと」の2つが助言された。この2つの助言は、まだ両親にできる残されたことがあることを見出すことができ、それだけで十分満足することができたのだ。

この時に得た診断と、助言は、子供が精薄であることの認知を著しく促進させ、極めて早期から、両親は、無知から来る無駄骨折と苦悩を味うことを最小限にすることができたのである。

3.2.2. 苦悩体験

家庭における母親へは、世間の冷たい眼に曝されていた。この点ではケースNの場合と全く同様

であった。

近所の人々の白い眼とコソコソ何かを言っているながら、本人が来るとピタッと話をやめてしまう、あの共同生活をした事のある方なら誰でも味った、まるで自分の家に犯罪人でもいるかの様な空気に常にふれていなくてはならないのです。その為子供には当らなくてもいいのに、必要以上に叱って、そのあとに反動的に必要な以上に愛撫するという様な、正常でない親と子の感情のやりとりが、他の面での鬱憤の代償として家庭内に持ち込まれるのです。ですから私が勤めから帰れば、聞かされるのは、その日一日中の妻の愚痴ばかりです。そして近所で厭味を言われた日などは、食事も喉を通らず一日中子供を抱きしめて泣き暮すというありさまだったのです。(140)

また、進学の時節などは、登校不能な子供を真中に、ただ大きな嘆息があるばかりだった。

いつ入学できるか解らない精薄の子供をもった私達は、本当にうらめしい、肩身のせまい思いを、春になる度に、皆とは全然反対な暗い顔をして、この3カ年も過ぎて来たので御座居ます。その上、子供も入学の意味はわからずに、「私にもランドセル買って」とせがまれると、「あなたには新しいぞうり袋と、おべんとう袋を買ってあげるから、また、幼稚園に毎日おりに遊びに行きましょうね」となだめるのが精一杯でした。だが夜になって、夫婦で、ラジオのスイッチを入れれば、新入学についての注意とか「父兄は新入学について、どうあるべきか」という番組のみ耳について、二人でやるせない、情ない気持になって、思わず顔を見合せ、「この子が普通だったらねー」と今更かえらぬ愚痴をこぼしては、深いためいきをつくのでした。(182)

実際には、精薄の子供をもつことが、夫婦の気持をマイナスにする何物をもないことに気づいたのは、ずっと後のことだった。この時期には、母親はただ周囲からの圧力に耐えるのに精一杯であったし、父親も、ただ自分の問題の整理に精一杯であった。「このような子供の親たちは一体どうしているのだろうか。」「大きくなれば自然に良くなってしまおうのだろうか。」と次々と疑問があった。当時、全く精薄については無智であった。これを知るのさえ恐れていたのだった。それだけに、N病院の人々の、自然な何の偏見もない態度に接することは、大きなよろこびであった。

親のこのような苦悩からの脱却は、このN病院につくられた、このような子供をもつ親たちの集りに出席するようになってから、はじまるのである。

3. 2. 4. 同胞の認知

N病院において、診察を受けたこのような子供をもつ親達が集って話し合う場をもった。このような子供をもつ苦しみ、愚痴、その他ここでは何でも自由に語ることができた。同じような子供をもつことがお互に同胞のような気持の通じ合うものがあった。やがて機関紙まで発行し、組織だった活動にまで発展したのである。お互に精薄についての知識も増加し、他人の様子、親としての心構えもこの集りの中から学習していった。

或るお母様は、「普通なら家の子の大学までの心配をしなくてはならないし、小学校入学だって、相当に考えてやらなくてはならないけれど、家の子はその心配は全然いらぬんですもの、せいぜい生きて行ってくれるだけの事ができるようにしてやることで精一杯ですわ」と、負けおしみや、愚痴からではなくて、本当に心からはとぼしる言葉を聞いたり、また、この子よりもっと状態の悪い子供を持たれた御両親に接し、その方々が、その悩みに負けず、張り切って人生を送ってられるのを拝見して、「この子だっ

て、のんびりと気永に育ててやれば、たとえ学校へは行かれなくとも、この世の中で生活位はできるよくなるだろう」と考えることができるように私達の心にゆとりがでてきたのです。

そう思って、日常の子供をみていると、字を教えたり、数を教えたりするのは、我々の考えている程重要なことではない様な気がして来たのです。勿論、せがまれば、一緒になって字を書いたり、教えたりはしますが、日課として取り上げてやるべきことではなく、それよりは戸外で大勢の子供達と喧嘩をしたり、泣かしたり、泣かされたりに、どろんこになって遊んでくれた方が、この子にとってはうんとプラスになると思ったのです。(183)

従って、この「両親の集い」に出席することは、O夫妻にとって、大きなよろこびであったし、自分たちの子供との関係における生き方を吟味して行く、学習の場でもあった。このような場をケースOは、ケースNより早期に知ることができたので、子供に対する本格的な努力を開始することもまた早かった。

3.2.5. 子供への本格的な努力

小学入学に当っては2年延期し、特殊学級を希望して入れた。この子にとって、プラスであると考えられていたことは徹底して行なった。すべて子供への熱心な努力を支えるものは「人事を尽さずして、天命はまてない」という合理的な欲求であった。可能な限り、何んでも子供に行なった。「スタートは零であり」従って努力して効果のあったものは、それだけ全部がよろこびとなった。このような努力の結果、次第に子供の行動に変化が生れて来るのも、両親の勇気を高めた。方法は、生活そのものから汲み取らせるという生活学習であり、家族生活全体がこのために構成された。例へば、左利きの矯正には次のような努力が払われた。

この子の左利きは、そんなに強度のものではないというのを先生にうかがいましたし、他の子供と変っていることは、劣等感を持ち易いので、次第次第に右利きに変えてやろうとしました。第一に、便所の紙の置場所を右側に変えました。またあまり、「左を使うな」と否定では言わず、どちらの手をつかってもそのまましておいてやり、毎日の必需品、歯ブラシ、コップ、石鹸などの置場所を右側に置いたのです。特に食事の時には、右側において左手では食べ難くて、どうしても右手を使うように自然にし向けました。食事中に水を欲しがるときは、水の入ったコップを右手においてやりました。テーブルに坐らせるのにも、なるべく向い合わず、左のすみに坐らせ、右から右からと注意を注ぎ、左の方にはなるべく気がつかないようにし、言葉でなく、自然らしい範囲の中で行動から汲み取ってもらいました。(80)

映画に行くということにも、次のように色々の配慮がなされた。

映画に行くにも、ただ映画に行くといって連れだすのではなく、「今日、お利口に一人で幼稚園に行つて、一人で帰って来て、ウガイをして、手を洗って、電車にのせても平気で皆と同じにしていられたら、いつもレコードで聞いているビーターパンのきれいな映画を見に行こう」とさんざんに恩を着せて、いろいろの注文を出して、いかにこの映画が面白いかという興味を湧き立たせると同時に、日常の躰もこの際に、ちやんと復習をしてもらい、映画という御褒美によって、日頃あんまり進んでやらないことを目的を考えて喜んでやらせてからです。そのかわり、映画館の中では、自由に、他人に迷惑になる位、ペチャペチャとこちらが説明してやるのです。(135)

このような積極的な努力の方向は、これまで背を向けていた近隣にも示され、精神薄弱児をわ

かってもらうため、努力して自宅を開放し、自分たちも一緒に子供たちと遊んだ。

この子の幸福のため、いや、そんなに難しく考えなくても、我々も一緒に生活して行くために、世の中から振り捨てられないようにするのに、親は一体何をしたらよいのか。それには、我々が生活をしている近所の方々の子供に対する理解こそ必要なんだということでした。「理解から愛が生れる」とか申しますが、家を理解して貰うために門を大きく開いて、近所の子供の遊び場を提供するという事を、いわず語らずの間に知らしめることを第一に始めました。(143)

新しく移ってから、まず、我々が第一にやるべきことは、近所の人々に子供のことを理解して貰うことに重点をおいたのです。それには一軒一軒、子供をつれて歩いて、「この子は精薄でして……」と押売りの様にするのではなく、そこの子供が自由に私達の家に来て、面白く遊べる環境をつくってやることでした。——この子の家に遊びにくると、自分の家では相手にしてくれない親と一緒に遊んでくれる。この事だけで、総てを忘れて自分のありったけの力で、その年令に応じて、それぞれ、この子に影響を与えてくれるのです。われわれは近所の人から感謝されながら、そして、自分の子供も社会的に伸びてゆけるという「一石二鳥」の方法でした。即ち、先ず、自分たちの心を開放し、そして子供を開放し、家に来る者総ては心を裸にして、のびのびと出来る雰囲気を作ることでした。(144)

このような努力の背景には、精薄児をもつことは、決して親自身の生活を暗くするものでないという確信をもち、親としての方向づけも生れて来ていたと考えられる。「他人の気持を気にしては、この子の教育ができないし、他人は批判と悪口は言っても、決して子供のプラスにはならない」のである。従って、外へ出て大勢と遊ぶ時も、他人の眼を気にして、引っこみ思案になることよりも、子供に注意を集中し、周囲の冷たい眼を堪えることができるようになっていった。

だまっていれば、ポーッと電信柱のように立っているので、肩に手をあてて「さ、しやがんでごらん」といって肩を押えてしやがませます。4、5秒たつと「さ、立ってもいいよ」といいながら私も立ちます。そしてまたすぐ前のようにしやがませます。これを十回くり返しました。勿論、他の客は「変な親子だな、前から変な子だと思っていたが、親も変かしら」というような視線で見ると、子供などは、洗うのを忘れてみているのです。「みるんじやないよ、さめるからさっさと洗いなさいよ」という、私にとっては身を切らたような言葉を背に受けながらも、「ボクだって、あなたが自分の子の身体がさめるのが嫌いなように、一生懸命ここで全身運動をやっているのです。本当にお互の子供は可愛いんですもの」と心で叫んでいました。(82)

以後、両親にとっては、自分たちの子供に示す努力が、子供の行動に変化をもたらすことによるこびを見出しながら、生活に自信を回復し、新しい希望と期待を発見していったのである。従って、この両親の努力は、自らにとっても大きな慰めと満足であった。子供のために何かしてやれること。夢中で行ってきた努力の数々。これが両親の生活を支えた。

3. 2. 7. 家族の努力子供への感謝

このような努力の間にも、常に夫婦間の愛情については注意が払われていた。親は子供の犠牲であってはいけないという考えは、職業上、米国人と常に生活を共にして来た経験を基礎にして、次第に両親の中に確立されてきたと考えることができる。「子供は親がいるから存在するのであ

って、親は子供のために存在するのではない」という意識は、日常生活の底流をなし、「自ら楽しくあることが、子供を明るく安定させる」という態度を基盤にして生活を設計し、子供への努力と同時に、夫婦の生活の楽しみを求める努力も続けられた。

その当時の様子は、子供—私、妻—子供の辺が強すぎて、私と妻との線が弱いので、強い正三角になるように、夫婦でつとめて仲良くし、と申しても子供の事を忘れてではなく、一時あずけの形をとったまま、新婚気分をもう一度も二度も味ったのですが、そうして私達が喜びに還って何事もやることによってこの子も自然に信頼感がわきましたし、叱ってもわからない子を怒れば、こちらも気分がすぐれないので、しただけさせることにしましたし、また子供の気分を変えるための約束はできるだけ少なくし、その代り、必ず果すことにしました。また、夫婦間でも明るく毎日を生活することに努力したのです。(180)

生活における子供の位置づけが決り、努力の方向が決ってくると、且って抱いた不安、絶望、苦悩は両親から遠のいて行った。生活には、安定と希望が生れて来た。それと同時に、この子がいなければ恐らく知ることのできなかった、多くの他の人の苦しみ、絶望感を深く理解することができるようになった。この子のために、むしろ多くの勉強をさせて貰うことができたのであった。この子の存在は、両親にとって大きな楽しみであり、この子に対しては、親として他人には味えないよこびを感じていた。このような愛情、いとしさの感じは、理屈を超えるものであり、遅れていようと、優れていようと「わが子」であることには変りないのである。このような気持は、「この子が天使である」といった時にびったりするようなものであった。

今は私共はさ程、悩みません。と申すのも、これも我が子、普通でも我が子、天才でも我が子、自分の子供であるという愛情は、その子が片眼であっても、気狂いであっても、皆同じではないでしょうか。しかも身体が丈夫な精薄なら、皆様が考えられる程、涙を出すのは、結局何にもならず、かえって子供を不幸にさせるし、その上、我々にだって、つまらない毎を送るとなれば、笑って日々を過す方が、もっと合理的だと思いを実行しているに過ぎません。(88)

本当に精薄のこの子のために私たちは、何と人生を明るく考えながら生活できるようにしてもらっていただくことでしよう。ただ感謝をするばかりです。(116)

この子は以上のように悪魔的な症状を示してはおりますが、私にとっては、どうしても理由なしに天使としか考えられませんでした。(151)

3.2.8. 社会へ伝える

両親にとって、再び大きな希望を与える、自分たちの「天使」となった子供は、誰の眼に触れても、両親の動揺とはならなかった。むしろ、他の多くの悩みをもっている人、どうしてよいかわからない人々に対して、自分たちの歩んだ道筋を記述して行くことによって、安らぎや希望を見出して行くことを期待した。また堪能な語学力を利用して、外国の啓蒙書を翻訳するなど、生活の全般的な姿勢が、これら精薄児のために向けられるようになって来たのである。そして、これらの努力は、外部に働きかけ、集団として社会施設その他の建設といった政治的な動きであるよりも、子供への養育経験の記述、啓蒙書の翻訳、他の両親たちとの話し合い、精薄児の教育な

どへの直接参加といった子供の生活に密着した形で続けられている。これらの社会への働きかけについては、現在もその過程にあり、もっと、その先を今後も注目し見極めて行かねばならないだろう。

以上、われわれは、ケースOにおける子供受容の過程をとらえた。次の項においては、ケースN、Oにおける子供受容の過程における諸問題を比較検討し、考察を加えたい。

4. ケースの比較考察

われわれは、子供受容の過程を8つの側面から理解したが、この両ケースは、必ずしも同様の過程を示していない。これは何故であろうか。このためにどのような条件が関与しているのだろうか。以下の考察は便宜的に図式化した8つの過程に沿って行ないたい。

4.1. 精薄児認知の過程

自分の子供が精神薄弱児であることの認知は、ケースNの場合、乳時期の大病や日常生活でよく気がつくなどの面が強調されていたために遅延され、ケースOの場合は、所謂「おくな子」という意識のために遅延させられている。子供を最初に専門家の手に渡すまでの時期のこの遅延は、ケースNの場合、兄弟等の発達の比較から、遅れが明瞭であったのにも拘らず、また、ケースOでは、近所の医者のおすすめもあったが、遅延されている。

この2ケースを通して、認知遅延の時期に関しては、両者に差があるが、これがいずれにも見られることは、むしろ親の「情愛」とでも名づけられるような、子供の発達に対する希望的楽観によっているように思われる。この時期における精神身体発達の情報や知識が、このような問題の解決に役立つであろうか。単なる知識の存在が、この楽観的希望の背後にある「情愛」ともいう親のもつつよい力を動かすことは、本ケースにみられるように困難のように思われる。この点では、親のもつ知識の性質をもっと深く吟味しなければならないだろう。この場合、次の点の考慮が必要であろう。即ち、経験の裏づけのない文字的知識であるか、経験によって得られた知識であるかの吟味である。知識という点から見る場合、後者の体験的知識の獲得が特に強調されなければならないだろう。

ケースNの場合、医者診断は一種の気慰め的な形で母親に伝達され、どの医者も同じであった。ケースOの場合、診断は正しく行なわれていたが、親はただ医者から冷たくつき離されたという意識しかなかった。前者の場合は、医者診断無能を意味するのではなく、情報伝達の拙劣性を意味している。これは後者の場合でも、また同様の見方をすることができるであろう。この状況における親の疑問は、「何故おくられているのか、どうすればよいのか」である。医学的に、または、心理学的に正確な診断がなされたとしても、親のこの疑問に答えられない限り、それは無意味であり、本ケースに見られるような医者不信感を生む結果となるのである。

ケースNにおいては、中学入学まで、子供への必要な処置が遅延され、その間の親自身の不安、苦悩に外部からの如何なる支えもなされなかった。これに対して、ケースOでは、両親の「白黒をはっきりさせずにはおかない」行動傾向から、曖昧さを許容せず、初期のつまづきを契機にして、問題の明確化に努力した。従って、子供が精薄であることを知った時、一時的に破局的な経験も大であったが、ケースNにみられる認知の遅延を条件にした無駄な骨折りや苦悩を最小にすることができたのであった。適切な指導者を通して、このような子供に対して、親の努力のなし得る領域のあること、親にしかなし得ないことのあることを理解したことは、親自身の生存への勇気を与える最も大きなものであったことが、ケースOにおいて明らかにみることができる。

両ケースにおける認知の時期のちがいや、認知に対する態度のちがいは、子供に対するそれ以後の態度のちがいを、苦悩的経験のちがいとして結果している。ケースNが受身的に問題に耐え、夢中で、無計画に、子供へ読み書きを教えたのに対し、ケースOでは、積極的に問題解決への努力を行ない、組織的に、冷静に細部にわたって計画的に徹底した子供の指導を行っていった。そして、ケースNが、ただ自分たちの努力の無意味さを知り、これまでの苦しみに、更に新しい苦しみを加えるという経験しか得なかったのに対して、ケースOは、自分たちの努力によって示される子供の行動変化によるこびを見出し、努力に対する報いとして新しい希望を見出して行くことができた。子供に対するわずかの姿勢のちがいが、このように対照的な結果となって示されていることは興味深い。

4.2. 社会との接触

受身的な態度を基本姿勢としていたケースNは、環境からの力を重圧として受けとめ、自らの中に閉じこもり、社会との断絶を企てることによってこの重圧感を避ける。これに対して、ケースOでは、積極的な態度を基本姿勢としていて、環境の重圧を、自らを開放することによって解消させていった。従って人の集まる場所においても、他人の自眼視を避けることよりも、子供が如何に楽しむか、自分との関係がどうか、関心が集中されている。

このようにみえてくると、ケースNが受身的態度から、精薄の認知と、認知に伴う本格的努力という形で徐々に積極的な態度を形成していったのに対し、ケースOでは、この過程が一層短縮されて展開し、特に積極的な態度の面が強調され、而も、これによって、親自身の安定感や受容の過程が進行していったことを知る事ができる。

4.3. 夫婦関係・親子関係

苦悩経験を支えたものの中核の一つとして、夫婦関係と家族関係がとり出された。ケースNでは、子供の問題が母親のみの苦悩として、これに耐えねばならない状況であったら、死を選んだかもしれない。母親を支えたものは、夫が、妻に示した配慮と父親として子供に示す温かさや兄妹のこの子供に対する配慮であった。そして、この支えの上に、母親も子供の「杖」として一

生を送ろうと決意する。

これに対して、ケースOでは、最初から父親の参加があった。子供が精薄であることを認知した時、悲嘆にくれる母親をみて、子供よりも先ず、家庭を立て直すことを思う。ケースOにとっては、子供は親の存在によってはじめて存在するものであり、子供のために親が存在するのではなかった。従って、子供のために犠牲になる、「杖」になるという意識はなく、夫婦関係と親子関係は同一次元に属するものではなかった。

ケースNにおいて、つよい子供との **Identification** がみられたのに対して、ケースOにはこれが少なく、子供の状態についての吟味は、親たちの欲求から切離して行うことができた。従って、苦悩を支える最も基本的な条件を、ケースNでは、夫婦、家族関係の中に見出すことができたのに対して、ケースOでは、親子関係そのものの中に見出し得るように思われる。前者にあっては、夫婦関係、親子関係が質的に区別のできない、渾然一体となった未分化性を特徴としており、後者においては、それぞれが独立し、且つ統合されている分化性を特徴としている。

4.4. 同胞発見の意義

このような子供が自分の子供だけではない、もっと重症の子供たちもいるという認知、特殊学校、養護学校での、のびのびとした子供たちの生活の発見は、ケースNでは中学入学期、ケースOでは、N病院にはじまった。同じ子供をもつ、このような人々との交りは、同胞意識によって結びつき、これまでの絶望と不安と孤独に希望と安らぎを与えた。

同胞の認知は、また、子供に対する親の認知を促進させた。ケースNでは中学期までの遅延を示したのに対し、ケースOでは就学前においてなされた。この両ケースにあけるちがいは、子供の認知とそれに伴う処置、親の態度の形成など、両ケースの間に可成りのずれを生ぜしめる一つの条件であったと考えられる。

子供に関する認知の促進という観点からすると、この同胞の認知は、両ケースにおいて共に促進的に参与しており、早期である程、以後の態度形成に大きな影響を与えることが見出される。この同胞間の話し合いは、組織的に構造化されてはいない、単なる「うちあけ話」的な場となっているが、これを構造化し組織化し、所謂、**Group Counseling** 状況を形づくって行くことによって、親の認知、態度変容は一層促進されるかもしれない。この点は、試みられるべき今後の課題であろう。

4.5. 親の態度変化、子供受容の過程の方向

子供に対する不安、精薄の認識、苦悩、同胞発見による絶望からの脱却と子供への本格的努力、努力による親自身の社会全体に対する態度の変化、子供の存在への感謝を経て、社会的な啓蒙活動へと変化している両ケースの子供受容の過程は、Rosen や三木の言うような、親自身の成長、発展の姿であると見る事ができる。このような態度変容の過程は、どのような親にもみられるものであろうか。

既に、「問題の項」において示したように、われわれとしてはこれを次のような過程として理解したい。即ち苦悩群は克服群になる可能性を有している。但し、苦悩群の低次型はこのような変容がない。克服群にあっては、それが本ケースの如く、社会的啓蒙活動に意義を見出す社会型に属するか、日常生活の中で安定した関係を保ちながら、特に社会的な活動は行なわない日常型に属するかは、むしろ、親自身の人生観、Personality、などによって決定されるものであり、統合の程度によって示される段階の差の問題ではない。それぞれの型に、高い統合性を示す Person とそうでない Person が存在するのであろう。

従ってこの最終段階の統合性の問題は、単に子供受容の局面からみるのではなく、親の人格性発達としてとらえなければならぬかもしれない。われわれとしては、親の子供受容の過程が、親子関係の質を決定し、精薄者としての子供自身の適応性を決定するという局面に立って、今後この問題を追求したいのである。

5. 今後の問題

研究の今後の問題として、次のような諸点を吟味したいと考えている。

(1) 今回、手記の分析を中心とした現象学的分析の試論を行なった。ここで行なった分析は、われわれの研究計画の一部をなすものである。今回は、克服群の日常型及び苦悩群については何らの分析も行なっていない。今回の試論を通して得られた諸所見に基いて、更に各群についての分析を行ないたいと考えている。

(2) われわれは、少数のケースであるが、これまで数年間に亘って、精薄児の親の Counseling を行なって来た。これらは、直接的な、治療関係に中心があるものであり、手記分析とは異った直接的な現象学的分析が可能である。Counseling における、精薄児の親の治療過程（人格変容過程）の分析も今後の研究の一つの課題である。

(3) 本研究の過程において、われわれは直接、多くの精薄児の親に面接したり、養護施設における多くの精薄の子供たちや、保母や教師たちと接触した。そして精薄児の親たちが、このような施設の保母や教師たちの手を通して、大きな態度変化、人格的成長を示していることを知ることができた。このような点から、親の態度変化に参加している、施設の保母、教師たちの諸条件を明確にしていかなければならないと考えている。

ま と め

精神薄弱児の親の子供受容の過程に関する問題の手掛りを得るために、今回は既に、子供受容の問題の解決を行なったと考えられる2ケースを取りあげた。精神薄弱児をもつこと自体が苦悩であり、ここから親たちがどのように立直っていくか、これらの精薄児の親に課せられた限界状況の克服過程は、今後、精神薄弱児の問題を考える場合、一つの示唆を与えるであろうというのがその分析の意図であった。

方法として、これまでに色々の形で表現された手記、私信などを用いた。

これらの分析から、親の受容過程に、次のような8つの段階を見出した。即ち、(1) 子供が精薄児であることの認知過程、(2) 盲目的に行なわれる無駄な骨折、(3) 苦悩の体験の過程、(4) 同じ精薄児をもそ親の発見、(5) 精薄児への見通しと、本格的努力、(6) 努力や苦悩を支える夫婦、家族の協力、(7) 努力を通して、親自身の人間的成長を子供に感謝する段階、(8) 親自身の人間的成長、精薄児に関する取扱いなどを啓蒙する、社会的活動の段階である。

本研究の対象となった2ケースにおいては、全体の受容過程としては類似していながら、個々の点では、可成りのちがいが見出された。即ち、一方が受身的で、苦悩期間が長く、同胞の認知、よき指導者がなかったのに対して、他方は、積極的で、開放的であり、よき指導者に恵まれ、同胞の認知も早く、子供への本格的努力も、安定した形で行なうことができたなどである。

苦悩を支える要因として、家庭の深い愛情関係の存在が指摘され、苦悩に作用する要因として、子供との Identification が重要な位置を占めることを見出した。

今後の問題として、この試論を基礎にして、精薄児の親の他の群にも同様の試みを行なうこと、精薄児の親の Counseling Process の分析及び、精薄児施設の保母、教師の親に対する教育的役割りの分析が要求されなければならないことをのべた。

＜付 記＞

本研究に当っては、数多くの人の労をわずらわせたり、お世話になったりした。ことに、資料を貸して下さったり、話し合いに応じて下さった仲野氏夫妻、度々夜を徹して話し合っ下さった小野夫妻、あざみ寮の三浦、石原先生はじめ諸先生、また貴重な助言を幾度もいただくことのできた近江学園の田中氏、貴重な時間をさいて話し合っ下さった小林さん、にはお世話になった。記して、ここに感謝の意を表します。

文 献

- 1) ボイド・ダン、小野法郎訳 精神薄弱児の両親が昇ってゆかなければならない3つの階段。スリー-R 研究会。(東京 1959.)
- 2) Coleman, J. C., Group therapy with parents of mentally deficient children. *Amer. J. Ment. Def.* 1953, 57, 700—704.
- 3) Doll, E. A., Counseling parents of severely mentally retarded children. *J. Clin. Psychol.* 1953, 9, 114—117.
- 4) French, A. C., Levbar, Michal-Smith, H., Parent counseling as a means of improving the performance of a mentally retarded boy: A case study presentation. *Amer. J. Ment. Def.* 1953, 58, 13—20.
- 5) 藤本文朗 精神薄弱児の心理療法(Ⅳ)日本心理学会第26回大会抄録 p. 261. 1962.
- 6) Kanner, L., Parent's feelings about retarded children. *Amer. J. Ment. Def.* 1953, 57, 375—383.
- 7) 正木正ほか、精神薄弱児の人格性発達に関する研究—信楽寮を中心として—第一報 京都大学教育学部紀要 V. 1—44. 1959.
- 8) 三木安正 親の理解について、精薄児研究1号 昭31、(精薄児講座 1. p. 177より)。
- 9) 三木安正 精薄児をもつ親の態度、精薄児研究 15号 昭34. 25—40.
- 10) 仲野美保子 この子の杖に、精薄児とお母さん、主婦の友社、1957.
- 11) チェンバレン、モス、小野法郎訳、愛の奇蹟、法政大学出版局、1957.
- 12) Rosen, L., Selected aspects in the development of the mother's understanding of her mentally retarded child. *Amer. J. Ment. Def.* 1955, 59 (精薄児講座 1. p. 176より)
- 13) Stone, M., Parental attitudes to retardation. *Amer. J. Ment. Def.* 1948, 53, 363—372.
- 14) Waterman, J., Psychological factors in parental acceptance of feebleminded children. *Diseases of the Nerv. System.* 1948, 9, 184—187.
- 15) Weingold, J. T. and Hormuth, R. P., Group guidance of parents of mentally retarded children. *J. Clin. Psychol.* 1953, 9, 118—124.
- 16) 山本敏雄 精薄児をもつ家庭内の葛藤と緊張、児心精衛、24号、1955。(精薄児講座 1. p. 174より)
- 17) 青島十年 東京都立青島養護学校 1957.